

平成 22 年 5 月 17 日（月）西部研究会

浄影寺慧遠『観経義疏』における「僂淨信見」について

伊藤 瑛梨（佛教大学大学院）

浄影寺慧遠（523～592）（以下、慧遠と略す）がその著『観無量寿経義疏』（以下、『義疏』と略す）において、『観無量寿経』（以下、『観経』と略す）を「聖人のための教え」と捉えていたとするのが、一般的な説であった。

だが一方で、慧遠は『観経』を「凡夫のための教え」としていたという説も存在する。その凡夫説を裏付ける理由の一つとして、慧遠が『観経』における「観仏」を凡夫のための低き行と捉えていたとする点を挙げている。

慧遠は『義疏』の冒頭において『観経』の経題を解釈する中で「観仏」論を展開するのであるが、まず「観仏」には「応身観」と「真身観」という二観があることを示し、これら二観には各々「始」「終」があると説く。慧遠は「応身観」に対し、その「始」を「僂淨信見」、「終」を「真実見」とした上で、『観経』における「観仏」を「応身観」中の「僂淨信見」と規定する。

凡夫説を説く先学は、この「応身観の「始」である僂淨信見」という文言中の「始」と「僂」という表現に注目し、「始」が「観仏」行の初期段階を意味するものと見なし、また「僂」が付されているが故に「粗い淨信による見」と捉え、これらを慧遠が『観経』の「観仏」を凡夫に適した低き行と位置付けていたとする理由として挙げている。

しかし、慧遠は『観経』における「観仏」行に階位のあることは説いておらず、また低き行の根拠とされる「僂淨信見」が本当に低い行なのかという問題も含んでいる。

発表では「僂淨信見」と「真実見」の関係性を明らかにした上で「始・終」の問題を論じ、続いて「僂淨信見」の「僂」の意味について検討・考察を加えることによって、慧遠が「僂淨信見」を決して低き行とは捉えていないことを論証した。